



# 南極

第10号

平成14年1月17日  
南極倶楽部会報

## 足軽から化石へ

鈴木 康

第1次観測の頃、「設営部隊は観測する学者たちを支える“足軽”である」と西堀先生は宣言されたそうです。(NHK プロジェクト X 挑戦者たち 7 未来への総力戦、145、149 頁)

私の担当した設営庶務は、その足軽各部門の共通事項のとりまとめ、あるいはどの部門にも属さない諸雑務の処理が仕事でしたから、足軽を支える役割でもあったわけです。具体的には、宗谷に乗る前から降りるまで、積荷関係の事務、つまり、機材・物品の集積・梱包・積付・荷卸・輸送に関する計画・管理の事務に大半の手間と時間が費やされました。こういう仕事を私が仰せつかることになったのは、おそらく隊員候補者の中に事務屋が少なかったことと、私が設営部門の要員の中ではかなり早い時期から南極の仕事に専念できたことによるものと思われます。それにしても、大学学部卒業後4年目にしかならない若僧が、暗中摸索をくり返し、あちこちの壁にぶつかりながらも、諸先輩のご指導のもとに無我夢中でやっているうちに、隊内における事

務局的機能の存在意義が認められ、第2次観測以降「設営庶務」という役割が隊員人選の当初から明示されるようになったのは幸甚でした。

第1次観測は、前人未踏のリュツォ・ホルム湾に突入し、昭和基地を建設して越冬観測を開始できたことから、奇跡的な成功といわれてきました。しかし当事者の隊員乗組員にとっては、台湾東沖での台風遭遇、船酔いから始まって氷海航行、基地選定時の意見対立、パドル、そして帰路の立往生、オビ号救援と、ハラハラ、ドキドキの連続でした。私の分担した積荷関連作業もご多分に洩れず、一種の綱渡りのなりスクを犯しながら無理を重ねて押し通し、何とかやり抜いたという感じです。最終的には2月15日の宗谷離岸までに151トンの資材を基地に輸送し、119トンを冰山陰と宗谷停泊地に留置して、越冬に可能な条件を十分満たすことができたわけですが、そこに至るまでのプロセスは、見込み違い、予定の遅延、計画倒れのくり返しでした。

たとえば出港前の積込作業では、積込最終日になってから続々大物の搬入が相次いで、積残しの恐れが生じたた

め、雪上車を含む積替えを徹夜で敢行し、甲板積みも何のその、とまかく全積荷を収容して翌日早朝やっと芝浦岸壁を離れることができたというケースもありました。

こういう事情から日通が積込後に提出した積荷目録は不完全でしたので、船に乗ってから目録づくりに励みました。日通資料のほか、各部門作成の梱包カード、積荷期間中の当番日誌などをもとに整理し直し、必要に応じて担当者に何うとか荷物点検等のためハッチが開かれたとき確認するなどの方法を取り、積荷リストの整備を急ぎました。積替えが行われて委細不明だった No.2 ハッチの開蓋中に入り込み、時間をかけて積荷のコードや位置を確かめているうちに夕方になり、ハッチの蓋を閉じられてしまった時もありました。寒くはなかったし、隙間に横たわって一晩過ごし明日の開蓋を待つことになっても仕方がないのかなと思っているうちに蓋が開きました。当直の鳥居先生が私の行方不明に気付かれ、救出してくれたのでした。こうして、ケープタウン入港直前に「宗谷積荷明細」は完成しました。観測隊の積荷個数は 6,900 個、重量 400 トン、容積約 1,600m<sup>3</sup> でした。

定着氷での荷卸・輸送については、基地からの要望に応じて必要品を整える方式をとりましたが、ハッチ内の積付状態は基地建設の優先順位とは無関係でしたから、荷卸と移動に予想以上

の手間と時間がかかることになり、氷上に放置せざるを得ない積荷も大量に発生しました。風向きによって定着氷が崩壊した場合にこれが問題となりました。

どうも設営庶務隊員のぼやきみたいになってしまいましたので、当時の回想はこのあたりで止めます。あれから 45 年経ちましたが、第 2 次観測の時は、前回の経験を活かして周到な準備ができたうえ、650 トンの積荷をハッチ内にすべて収容する作業を所定期間内に計画的に遂行したにも拘らず、極地での悪条件に阻まれて不成功に終わりました。しかも、最小限の越冬隊を残そうとして、必要物資取出しのため一時氷上に荷卸・開梱した資材 100 トンの全部を、再び船に収容することができなくなり、その一部 32 トンを残置するほかなかったというおまけまでつきました。

その後は、昭和 38 年 10 月、会計検査院に対する「第 1 次・第 2 次隊の極地行動中における物品亡失に関する報告書」資料の作成、そして昭和 39 年 11 月、鳥居先生の(財)極地研究振興会の設立事務のお手伝い、会誌「極地」編集委員、昭和 63 年 5 月、同理事、昨年 4 月常務理事をさせていただいております。しかし昨年 10 月、国立極地研究所で 43 次隊の総員集合の時、楠先生が財団の説明のあと私を紹介する時いみじくも仰言ったように、もはや化石ということですので、これを表

題に使うことといたしました。

(1次夏・設営一般、2次・設営庶務)

## 変な外国人のこと

### 渡辺清規

第3次南極観測の時、オブザーバーとしてダニエル・メロイというアメリカ人が宗谷に乗って来た。彼は言葉遣いに特徴があったが、日本語も日本のこともよく知っていた。背丈は私と余り変わらず、どちらかと言えば華奢な外人で、仕事をよくし、誰彼なく話掛ける人懐っこい性格の持ち主だった。

南極の空輸作戦を終えた宗谷が再びケープタウンに寄港して数日後、メロイが私をドライブに誘った。三田、竹内両氏と同勢4人、9時半頃レンタカーで東に向かう。途中の景色や街の佇まい、着飾った子供達などを眺め、原っぱで弁当を食べ、なお車を走らせていると、湖に差し掛かった。

湖上にはヨットが浮かび、湖岸に建物があり、門に「訪問者歓迎」とあったので、車を乗り入れると、此处はヨットクラブで、日曜毎に仲間が集まって、セーリングを楽しみ、ヨットも造っているという。

飲み物があると言うのでコーラ - を飲んで金を出すと、要らないと言う。それではと、遇々持っていた50円コインを差し出したら、大喜びで受け取ってくれた。

更に東に走るにつれて、丈の高い樹

木は消えて灌木となり、やがて赤茶けた岩と石と土の世界となった。車を停めたメロイは、この荒涼たる景色を眺めてから、やがて引き返し、Goudini Baths に向かった。

其処は数日前に訪れて歓待された所だという。我々も大歓迎を受け、温泉プールで泳ぎ、心のこもった饗応を受け、帰船したのは午前1時だった。

このドライブ中の車内で私は、この日本のことに詳しい外人を試してみたくなり、まず「三種の神器」を質問してみた。「はい、八咫の鏡、八坂瓊の勾玉、天の叢雲の剣」と即座に答えた。次いで、歴史上の人物を聞いても知っている。

最後の切り札に「落語の“時蕎麦”を知っているか」と聞いた。「1つ、2つ、3つ、4つ、5つ、おう今何刻だい」「6つだ」「そうか7つ、8つー」というのでしようと答えてから、「蕎麦食いの名人の噺を知ってますか」と逆襲された。

残念ながら、私はそれを知らない。彼は語り始めた。「蕎麦食いの競争に勝ちたいと念願していた或る男が、偶々通り掛かった原っぱで、人間を呑み込んで四苦八苦している大蛇を目撃した。見ていると、何とか呑み込んだものの腹がはち切れそうだ。

やがて、苦しみながら或る場所に辿り着くと其処の草を食べ始めた。すると意外や意外、あんなに膨れていた腹がスーッと細くなり、元気を取り戻し

て行ってしまった。

これを見ていた彼の男は、これだと手を打って喜び、やがて蕎麦食い競争の当日、蕎麦を腹一杯詰め込むや、例の場所に行って大蛇の食べた草をむしゃむしゃ食べ始めた。

蕎麦食い競争は終わったが、彼の男は姿を現さず、探したところ、或る場所に大量の蕎麦が流れていたという」のである。

お分かりですね。大蛇が食べた草は蕎麦を溶かすものではなく、人間を溶かす草だったのである。完全にシャッポを脱ぎました。(3次~6宗谷・航空)

## 神のキックオフ

田口章利

29次観測隊・夏隊の最終盤、地学班に同行してリーサーラルセンの岩山を踏んだ折だった。どこまでも深く青く、冷たく澄んだ空と、今にも崩れ落ちそうな危うさで正面に迫る大陸氷河の舌先。ハンマーで岩を砕く以外には、何一つ音もない。

その凜と張りつめた無音状態の中に置かれた一個の自分に気づいた時、眼前に広がる荒々しい光景に、突然、地球が惑星であるとの天啓にも似た感覚が襲った。

何十億年もの気の遠くなるような時間を内懐に抱え込んだ、裸の地球。優しく穏やかな日本の自然とは、まるで違った荒く猛々しい太古の世界。広大

無辺な、絶対零度に近い暗黒の宇宙空間を飛ぶ他の惑星や宇宙塵と同じく、無機質の地球はこんなにも荒れていたのか そう思った。

冷え冷えとして緑さえないその世界は、予備知識も与えられず、目隠しをしていきなり連れて来られたならば、「地球ではない、どこか別な惑星」と教えられても信じただろう。そして、その硬い岩球の表面を、平均水深3,795m、最大深度10,924mで浸した海と、わずか8,000m辺りの上空まで被膜のように薄っすらと覆った大気が、辛うじて生き物の存在を許してくれている。太陽からの光と熱を、大気と海洋の大循環が球体の全表面に満遍なく行き渡らせ、雲を生み、雨を、雪を地表に降らせて、温度と湿度とを程良くコントロールする。今、目の前にある南極の姿こそ、緑なすたおやかな日本の山河を一枚めくった、真の地球の姿なのかも知れないそれが啓示の意味だった。深海底と地底の生物圏の存在が明らかになった今日でも、あの時の理解は、深まりこそすれ揺らぐことはない。

約1億5,000万年前、 Gondwana大陸がマントル対流に乗って四分五裂し、南極大陸は今の位置に流れ着いた。太陽に対して23.5度傾いた地軸の綾が、その大陸の全表面を平均標高1,900mで覆い尽くすほどの雪を降らせ、厚い圧密氷に変わって岩盤を沈めた。寒暖の差が最大50前後、内陸での最低気

温がマイナス 90 にもなる“死の世界”に、生き物の多くは温度差の少ない海へと逃れ、わずかばかりの蘚苔類とダニなどの微生物だけが、己を悼むように極寒の中を生き延びて来た。数十万年前、“神のキックオフ”で静かに降り積み始めただろ雪のひとひらが、何によるものなのか、その理由は未だに明らかではない。日本の約 37 倍という、1,390 万 km<sup>2</sup> の大陸を覆い尽くした 2,300 万 km<sup>3</sup> もの莫大な量の氷が、増えているのか減っているのか、それさえも分かってはいないのだ。

気象や大気、超高層、隕石、生物など「南極での観測」だった時代から、「極域で見る地球という惑星の科学」へ 1956 年、IGY(国際地球観測年)への共同参画から始まった日本の南極観測は、40 余年を経て一段と大きな飛躍の時を迎えようとしている。内陸拠点の「ドームふじ」では、今年から 3,000m 級の氷床掘削に挑戦する。前回の掘削で得られた 32 万年分の氷を上回る、100 万年規模の氷床コアには、地球の大規模な気候変動サイクルを解明する手がかりに加えて、ほ乳類の爆発的な繁栄へとつながる、生命圏の進化過程を解き明かすための材料が、数多く含まれていることだろう。

宇宙の成り立ちから星の誕生、さらには太陽系の生成から生命の起源の解明へと進む科学のフロンティアは、火星の極冠や木星の衛星にも原始的な生命が存在し得る可能性を示唆する。個

人的には、惑星科学が明らかにしつつあるそうした知見と、氷床コアや隕石の分析など極域研究の新たな段階を通して得られる知見とが、人類の知を一段と高みに引き上げてくれることを期待している。

それが、太陽系第三惑星・地球という星の稀有な在りようを、より深く認識させてくれると思うからだ。それはまた、我々がいったい何者なのか、この宇宙の中でどういう存在なのかということにも、必ずや解明の糸口を与えてくれるに違いない。(29 次夏・同行記者 / 読売新聞社)

## 新米副長の思い出

根井 繁

私は、昭和 48 年 9 月に総合幕僚学校の学生となっていました。翌昭和 49 年 7 月に学校の課程を終了し、それぞれ新配属先に赴任することになりましたが、私ははからずも砕氷艦「ふじ」副長を命ぜられ、第 16 次行動に従事することになりました。

お恥ずかしい話ですが、それまでの南極に関する知識は皆無といってよく、せいぜい南極は大陸で厚い氷に覆われており、生物としてはペンギンとアザラシがいるという程度のことしか、知りませんでした。そのような者が「ふじ」副長になったわけです。

しかし、知らないからといって、手をこまねいていることはできません。

とにかく先輩の経験と知識を吸収することにし、乗組員から話を聞きました。貴重な話も多かったのですが、乗員は概ね2年交替であり、1回の経験であるので、普遍性に乏しいように思えました。そのため、第1次の「宗谷」からの報告書を精読するとともに、六本木にあった海上幕僚監部の映写室に向き、「ふじ」の作成した16m/mの記録映画を総て見ました。

これらのことを通じて、経験はありませんが、南極に関する知識と、砕氷艦による氷海航行についての、ある程度のことは判ったような気がしました。

これらに加えて、文献も探して読みました。そのうちで参考になったのは、「POLAR OPERATIONS」(Edwin A. MacDonald, U.S.N. 著)でした。経験豊富な元艦長の著述は説得力があり、為になったと思います。

また、「北氷洋の氷」(エヌ・エヌ・ズーボフ著 北海道大学低温科学研究所訳)も極めて有効でした。今から40年以上も前の本ですが、北極海に接する旧ソ連の研究成果が、まとめられていたと思います。

このような知識を元手にして、新米副長として第16次行動に参加することになりました。その間、森田艦長から懇切な指導を受けるとともに、観測隊の星合隊長、吉田副隊長はじめ皆様方から、いろいろなアドバイスを受けることができました。

これらのおかげで、第16次行動で

の任務を、なんとか遂行できたような気がします。また、昭和基地での作業を終了し、帰投途中にパックアイスの中で、「ふじ」が昭和50年2月13日から約7日間ビセットしましたが、その時も、かなりの確に、状況を判断することができたように考えています。

その後、第17次、第21次、第22次と南極行動に従事しましたが、大過なくすごすことができました。ひとえに観測隊長、副隊長ほか皆様方の助言と協力によるものと、感謝しています。

とりとめのない文章になりましたが、素人だった新米副長のころの思い出を、つづってみました。(16次ふじ・副長)

### 13次隊の思い出

福島正治

第13次南極観測隊の清野善兵衛隊長ら40人を乗せた「ふじ」は「前田艦長」11月25日例年通り晴海埠頭から一路南極へ出港する。この時の越冬隊員の平均年齢は32才位の若い隊員であった。私達が南極へ行く2~3年前後してよく報道されたのは観測船の相次ぐ事故であったと思います。大氷山が南極海に横たわり数年間昭和基地への接岸を阻み、10次隊の帰りはオビ号の救出騒ぎ、12次隊では帰国途中長期のビセットを喰らい、日本に「ふじ」が帰国出来たのは5月であったと思ひ出します。我々13次隊が昭和基地へ近づくにはチャージング回数が最も多く

6,723 回行ったと聞いています。いかにあの頃の気象状況がよくなかったか、又、自然の厳しさが思い知らされる。13 次隊での大きなプロジェクトとして7基のロケット打上げと、内陸基地初の4人での越冬という川口越冬隊長としては心配の種ではなかったかと思えます。

私は調理担当として名古屋の五味さんと二人で13次隊の食糧を一年間、隊員の皆さんに喜んで頂けるように大変メニューには苦心したと思います。南極へ出発する前に中国料理の山翠楼やロシア料理のロゴスキー、木村パン屋さんへの研修が大いに役立った事はいうまでもありません。お蔭様で一年間バラエティーな食事作りが出来、隊員の皆様の健康と少しは研究成果の助けになったと思っています。今と違ってあの頃は食べる事が一番の楽しみだったからです。又、私達の隊での流行語は「人間関係大切だヨ」という相手を思いやる気持ちが流行語となり、一年間非常にうまくいった隊でありました。

一番辛かったのは越冬前の建設作業だった。毎日セメント作り、ヘリポート要員、鉄骨運び、休むまもない荷受け作業、ドラム缶起しなど飯場棟の生活がなつかしく思い出される。一週間ぶりで入った風呂で身体を洗うのに腕が上がらない状態であった。

もう一件はパッド島調査旅行へ出かけた事。ハリウタ氏、アイチャン、ド

クター、ドゼウ氏の5名の旅行隊、スカルプスネス過ぎホノール氷河が銀色に輝き自然の素晴らしさを後に磁石と地図を広げてパッドへと進むが一向に見えず、プレッシャーリージ群にぶつかってしまい、大曲しながら進むが、リージ群も後僅かという所にてシャーベット状の海水に突っ込んでしまった。KC から全員降りて見るとカタピラの所まで入ってしまい、色々と試みたが足場悪く救出する事が出来ず難航する。その時突然ズ、ズ、ズ、ズドーンと大きな音で皆ビクリとして顔を上げると近くのリージが崩れた音らしい。すぐ近くなのでとても不気味であった。引き上げる事は無理なので翌朝救援隊を基地から出動してもらい、2台の雪上車で引き上げる事に成功し再びパッド島へ向う。パッド目前にしクラック群へ遭遇してしまう。全員で氷の状態を調べに行くと、なんとオープンシー、いやな感じである。ハルチャン、ピッケルで廻りの氷をコンコンとたたき、大丈夫と言っていつもの楽観論を飛ばす。ドクター「いけるだろうー」。アイチャン、ドゼウ「大丈夫だなー」と言って、ドゼウ1人がソリ、居カブを引いたままリターンして30m位の間隔を取りスピードをつけて走って来る。クラックへ乗った瞬間氷が割れKCは大きく揺れ皆一瞬ハツとし、ドクター走りながら「止まれ、止まれ、行け、行け、行け」と大声で叫ぶ。KCはそのまま一直線に進み、ソリも居カブも

スーツという音を立てながら渡り切った。さっそく全員で現場を見ると大きく割れている。皆で落ちなくてよかったなあーと言い合った。一秒でも遅れていればあの時、海氷へ落ちていたろう。常に南極は生命の危険と隣り合わせである。ここから注意しながら進むと今度は大陸並みのサスツルギにあい、KCの振動激しく大変な道のりであった。この旅行記は一部であるが30年経った今でも忘れる事の出来ない思い出である。30名無事帰国出来、なによりだった。(13次冬・調理)

### 南極行の思い出

佐藤 守

背景：昭和51年4月、日本鋼管(株)津造船所で大型タンカーの設計に携わっていた私は本社に異動、砕氷艦「ふじ」に代わる新砕氷艦の建造を検討する職務につき、その年の11月に18次夏隊オブザーバーとして南極行に参加した。体が健康で少々のことではへこたれないことが社内の選考理由だったらしい。砕氷船については全くの素人であった。当時、文部省が主催する「南極輸送問題調査会」が「ふじ」に代わる新砕氷艦の建造を検討しており、本調査会の要請により「ふじ」の建造造船所からということでの乗艦であった。任務は「ふじ」の行動を実際に調査し、新砕氷艦の建造に資するということであった。造船屋からみた

南極行の思い出の一端を述べたい。

**艦内生活：**任務上、乗組員、観測隊員の航海中の艦内生活をつぶさに見て回った。昼間はもちろん、夜から朝にかけて3時間毎に見て回ったこともある。特に、赤道直下の機関室の暑さは格別でそれなりの対応をしているのもうなずける。食事が当時のレベルからすると良かったこと、フリーマントル出航後の新鮮な肉と果物が印象に残っている。

**暴風圏：**聞きしにまさる風浪であった。低気圧の発生場所ということで100m足らずの「ふじ」では、アンチローリング・タンクを装備しているとはいえ大きな揺れが避けられない。船の長さが波長に合っている。食事に来る人が激減するのもむべなるかなで、私も一回欠食した。艦橋にある振り型の動揺計は、横揺れ角が40度近くを示していたが、これは慣性があるからで実際にはそこまでは揺れていない。私が持ちこんだジャイロで計測した最大横揺れ角は21.7度である。それにしても大きな揺れである。加速度の最大は0.6Gであった。

**洋上観測：**色々な洋上観測をてつたわせてもらったが、「ふじ」は大きさ、船型とも観測船としては使いにくい。風浪の激しいこともあり小回りが効きにくい。砕氷船型重視であるからどうしようも無い面もあるが、「ふじ」の船型、行動に適した観測システムも一考の余地があるのではと考えさせられた。造



船屋としては少々だらしがないが。

**氷海航行：**試算では、「ふじ」の連続砕氷能力は 80cm 程度と見ていたが実際はそこまでいかなかった。流氷域はともかく定着氷では氷厚が 80cm ~ 150cm なのでもっぱらチャージング砕氷であった。ペンギンが遠くから「ふじ」の傍まで来て、ひとしきり「ふじ」の行きつ戻りつを物珍しそうに見て、飽きると「ふじ」の遙か前方に去ってしまうという速さである。この時の速さは約 0.3 ノット、時速 550m である。参考までにチャージング砕氷時での加速度は約 0.03G であった。暴風圏の揺れより遙かに小さい。

**物資輸送：**昭和基地より約 30 マイルから空輸を始めたが、積載量 2 トン、ヘリコプター 2 機による空輸では艦上での積み荷作業、昭和基地での揚げ荷作業を考えると、約 30 マイルがスムーズに輸送作業が行える距離であった。18 次では結局、昭和基地に接岸したがこの地点からはヘリコプター 1 機、ホースによる燃料輸送が主体となった。「ふじ」は砕氷艦ではあるけれどその主要任務は物資の輸送であることを実感した。

**後 記：**帰国途中、モーリシャスより呼び戻され、米国、カナダの砕氷船の調査に参加、新砕氷艦建造の気運が高まりつつあった。その後「しらせ」の建造に携わったが、この「ふじ」での経験が全て生かされたとは言いがたい。個人として、物資の輸送、観測隊員の

輸送及び観測システムのバランスをどうとすべきか悩むところである。「しらせ」に代わる新砕氷艦建造の検討が始まっているが、従来の考え方にとらわれず新しい発想のもとに進められることを切望している。(18 次夏・オブザーバー)

## 17 次医務長の思い出

伊藤敦之

### Part 3 医務室の硬いお話

長期間集団で海上生活を行うには医療・防疫・健康管理は不可欠な業務である。過去大量の人員が長距離を移動するには定期旅客船や貨客船が主力であったが、現在は航空機にとって代われ、船の出番がなくなったが最近では旅客船は観光クルーズに用途変更して復活した。その他多人数が乗船する船舶には商船・水産・海上保安等海事系諸校の実習航海、北海鮭鱒船団、過去南氷洋捕鯨船団等大規模漁船団には医師・看護婦(士)等の有資格医療職員が乗り組んでいる。

海上自衛隊では毎年砕氷艦ふじ(現在はしらせ)による南極観測支援、幹部候補生教育のための練習艦隊、米国派遣訓練等が行われ、臨時にペルシャ湾掃海、P.K.O.派遣等が行われ、えひめ丸救難のため派遣された。海外で日本国籍の船舶は日の丸か旭日の艦旗を掲揚すれば領土の延長と見なされる。

ふじの医務室は防衛庁長官から運輸

大臣（現在は国土交通大臣）宛て船籍を届出、厚生大臣（厚生労働大臣）に診療施設開設届を提出、医療法施行令に合格していれば診療所としての法的扱いを受ける。日本国内では厚生労働省が医療の国家統制を行っている以上海外行動中の船舶医務室も法的規制を受けるのである。もし無届で手術を行えば傷害行為とされ、麻薬を保管しても不法所持になる。

医務室の定員は医師・歯科医師国家試験に合格した士官各1名、衛生科員は看護婦（士）・診療放射線技師・臨床検査技師・歯科技工士・救急救命士等の資格有する海曹2名が乗組に指定される。従って年度により、専攻・特技が異なり、医務長は自分の診療科目でない患者を診察しなければならず、専門でないからと言って転送もできず、衛生科員も特技外の業務を行わなければならないところがとても辛い。

艦内編成では医務長・歯科長のうち先任者（兵隊の位が上の者）が衛生長、次席の者が衛生士とするが、今回は歯科長は2佐でも陸上自衛隊から転官直後であり、艦長付とし、3佐昇任直後の筆者が衛生長に任ぜられた。

フリーマントルでは税関との交渉、銀行への納金等でいろいろ癪にさわる事が多かったので出港直後士官寝室の名札には補給士兼衛生長と書き込んでおいた。補給長はアハハハ……。

海上自衛隊の艦艇医務室における医

療費は防衛本庁で医療施行費として一括し年間予算を計上し、乗組員（ふじ・しらせ観測隊も含むと思われる）には医療の現物給与（無料）という形で行われ、乗組員以外は健康保険適用外の自由診療となり医療費は国庫に納入しなければならない。

防衛出動、災害派遣等非常時には被災地域住民には無償で診療が行われる。平成7年阪神淡路大震災では艦艇が神戸港に接岸し、現在の医療施設が回復するまで、1ヶ月間被災者に無償で診療が行われた。

#### Part 4 医務室間の経済学

今は昔ヨーロッパからアジアにかけて某巨大国が存在したが1991年崩壊した。原因としてはロン（レーガン）、ヤス（中曽根）、マギー（サッチャー）枢軸に米国が英国には潜水艦用ICBM、日本にはイージス艦の資料をリリースしたので、この国はあわてて国力以上の軍拡に走ったためとは政治学者の表向きの話であるが裏では闇経済マフィアが暗躍したためと言われ、政権が交代しても今なお成長中だそうである。当時の艦内でも上級海曹の間に某国に比べればとるに足りないが闇経済が存在し、これが業務を円滑にしていたが必要悪なのだろうか、マルクスやケインズよりも実地に則した経済学を学んだ。

フリーマントルを出港するとアッと言う間に暴風圏だ。小さな器材・書類

等は棚から下ろし、引き出しに収納、麻酔器・歯科ユニット等重量物は太いロープで固縛、手術台もボルトを外し、倉庫に入れるが、医務室用の倉庫が少なく分散格納し艦の動揺に備えた。こういう作業は運用科が得意なので手伝ってもらい、看護長はサントリーオール1本を渡していた。

艦の動揺は最大片舷45°に達した。含漱薬の18リットル入り特大ペットボトルはロープで嚴重に固縛しておいたが、ボトルの底と床がこすれて少しずつ磨耗し、ついに底が抜け、医務室の床は大洪水、ソコまで気がつきませんでしたと言っても洒落にもならない。小型吸水ポンプを借りに行き、また1本提供した。

その後医務室で観測隊の医学・医療担当隊員と懇親会を催すと小看護（次席衛生員）は例の患者に「今日は医務室で観測隊の先生方と別法だ」と宣言し、看護長は何も言わずジロリとにらむだけで松茸の缶詰、鯨の尾身、本物のキャビア等が出てくる。このようなことに鈍感な筆者は看護長が何故報告をあげる必要がありませんと言った真意がわかったが、歯科長「今までピーナッツかかき餅ぐらいだったのにこの頃すごく豪華絢爛なものが出て来ますねえ」とまたまた心臓破裂するような発言をする。

南極への往復では大国・大都市には寄港しないが、練習艦隊では外交の重

要拠点と言うべき大使館のある所では医務官・駐在武官にけっこう薬品類をおねだりされる。中には金歯を入れてくれというような強心臓の職員もいる。司令官は緊急に帰国する時、パスポート作成してもらうこともあるから、治療してやれと言う。それでは乗組のどれかを治療したことにすれば無料でできますが、金の地金代だけは負担していただかないと会計検査院にばれるとやっかいですと言ったら、しぶしぶ払ってくれた。今にして思えば機密費が何かで払ったのかもしれない。

まだ続く予定

（17次ふじ・衛生長）

## 観測隊で学んだこと

小久保 壮

南極クラブの集会に参加したある日、ひょんな事から41次夏隊に参加させて頂くことになりました。学歴も何も無い私ですが、ただ多少の経験と壊れそうにもない体があるというだけで、村山雅美さん、渡辺興亜さんの多大なバックアップを受け、晴れて仲間入りさせて頂きました。

現地での役割は、ラングホブデ氷河、平頭氷河での観測のお手伝いです。平頭氷河左岸の露岩上にベースキャンプを設け、北大低温研の西村浩一さん、ブリュッセル大学のフランク・パティンさんと共に、約3週間にわたり観測

活動を行いました。氷河上に何本も竹ざおを立て、定期的に GPS でそれらの位置を測り、氷河の移動方向、量の測定。レーダーを用いての氷厚測定。日射による蒸発量の測定。平頭氷河下流の池に水深計を設置し、氷河が解けてどれだけ水位が上がったかを測る水位測定など初めて経験する事ばかりで、また測定の方法も様々で最新の電子機器を使用するものもあれば、ごくシンプルに竹ざおと巻尺だけで測定をしたりと感心する毎日でした。これまで何度か氷河上を歩いた事はありましたが、今回雪氷学に接したことによって氷河に対する見方が「山に登ったり、旅をしたりする時に通過する地形の内の一つ」から「成長と衰退を繰り返す生き物」に見方が変わりました。

途中でブリザードにも遭い、4~5日間動けずベースキャンプに釘付けになりました。ピラミッド型テントと登山用のドーム型テントの両方を張っていましたが、歴史のあるピラミッド型テントは強風に対してもびくともしなかった反面、ドーム型テントの方はポールが折れ、布地は無残にも裂けてしまいました。年々登山装備も強度を保ちつつ軽量小型化が進んでいますが、やはり本当の自然の厳しさにはいくら科学が進んだとは言え、人間の力では太刀打ちできるはずはなく、自然に対しては素直に向き合うこと、また交通の便、装備が良くなったおかげで誰でも

気軽にヒマラヤ、北極、南極と世界中どこでも行ける今日、最新装備に頼りきっての行動による大勢の遭難者が示しているように、体力や経験など人間が本来持っている“物”以外の能力を身につけることの大切さを、改めて教えて頂きました。(41次夏・気水圏系)

### 宮原正敏氏を偲ぶ

三田安則

昭和 55 年 1 月 30 日、夜に入ると気温も下り雪まじりの季節風が吹き荒れていた。

舞鶴海洋気象台は日本海西部に海上暴風警報を発令していた。韓国漁船の緊急避難通報等処理し終え、やっと一段落つきホッとしていた境海上保安部通信所に、23.08 スノーノイズの中から 500KHZ に突如 SOS、2 回入感。感度 2~3、後続通報なし。

固唾を飲んで聴取すること 10 分、再び SOS 遭難呼出、続いて遭難通報が送られてきた。

「QTH37-20.E133-4・・・、浸水のため沈没しつつあり。救助の手配願います」直ちに応答し E133-42 と確め引続き要目を問い合わせ、船名は混信のため判然としないが 5,130 屯、乗組み 23 名中 1 名日本人。西の風大時化。船体 20 度に傾いている。SOS 発信器のこと等次々と通報されてきた。

(註) QTH は現在位置

23.55 頃「浸水益々激しく椅子に座っておられない、こちら元海上保安庁に勤めていた宮原正敏、これより脱出する。乗組員はゴム・ボート1隻に乗り組む、SOS 発信器は備えていない」「巡視船手配している、頑張れ、頑張れ・・・」「RR・TKS・TKS あと宜しく、さようなら」

無事を祈りつつ「頑張れ、頑張れ・・・」を反復送信。宮原局長は死を覚悟しての通信であったと思われるが、危機に直面してなお、終始変わらぬ正確なモース符号を最後まで叩きつけて宮原局長の遭難通信は終わった。

(註) RR は了解、TKS は有り難う

荒天下、巡視船、航空機による海空からの捜索救助活動が続けられた。しかし、その結果は死者2名、行方不明20名、生存者僅かに1名という悲惨な海難事故となり、宮原局長の姿は遂に再び見る事は出来なかった。享年59才。敢闘の末、電鍵を叩き続け、その職に殉ぜられた見事な最後は、海に生きる男達に何時までも語り継がれるであろう、宮原局長こそ・・・第3次南極観測時の「宗谷」主席通信士であった宮原正敏氏である。

縁起でもないと言われるかも知れないが、私の手元には「南極観測船宗谷乗組員」の物故者名簿があり、2001年2月現在、51名(総員236名)である。その内、職に殉じたと思われる元乗組員は、昭和41年2月4日、東

京湾羽田沖で惹起した全日空機墜落事故の際、捜査・救助活動中、同年3月5日川崎沖にて事故で殉職した里野光五郎機長と長浜正信整備士、及び民間に移ってからではあるが殉職された宮原正敏局長の3名である。(つづく)  
(1次~5次宗谷・航海)

### 会務連絡

南極倶楽部会員の皆様、新年おめでとうございます。お健やかに新しい年をお迎えのこととお慶び申し上げます。また、会誌「南極」が第10号・記念号の発刊に漕ぎ着けたことはご同慶の至りです。神田啓史編集長(会員番号48)のご努力や大であることに心から感謝を申し上げたいと思います。

倶楽部会員数は2001年12月の例会時で240名となりました。昨年1月例会の折り渡邊興亜氏(会員番号5)より、当会の会務担当幹事を前後の見境も無く引き継ぎ、一年間その任に当たりましたが、私の非力から会員の皆様には大変ご迷惑をおかけし、誠に申し訳ありませんでした。私にとっての倶楽部の活動は、月例幹事を斡旋することのみが精一杯で、倶楽部としての新企画・催しもののアイデアの少ない一年であったことを反省し、会員諸氏に平伏してお詫びを申し上げます。

10月・11月の例会幹事は、塚崎元ふじ通信長(会員番号9)等の「ふじ

通信」部隊・安井和憲氏(会員番号 31)を中心とした皆様が担当されました。年の瀬と年の始めの例会幹事は、久松元しらせ艦長(会員番号 19)率いる「しらせ」組がお世話して下さいました。

また、南極倶楽部創立 3 周年を迎える 2 月期の例会と弥生 3 月の例会幹事役は、「プロジェクト X・宗谷発進」時代に熱き血潮を南極に燃やした「宗谷」の三田安則さん(会員番号 11)を中心とした先達各位が担当して下さいる手はずになっております。

南極倶楽部が会員相互の憩いの場で有り続けることを祈りながら 2002 年 1 月例会で私自身は 1 年間の会務担当の任から解放されます。皆様のご指導に感謝いたします。今後とも一会員として例会への参加を心がけてまいりたいと考えますので、どうぞ変わらぬ督励ご交遊の程をお願い申し上げます。ありがとうございました。

(追記：例会会費 5%事務経費分は、毎月間違いなく佐野会計幹事(会員番号 28)に託したことをここに宣誓してご報告申し上げます/詳細は 1 月例会時の別途配布資料をご参照下さい)  
平成 14 年 1 月鮎川 勝(会員番号 53)

### 編集後記

南極倶楽部会報の記念すべき第 10 号が出ました。記念号には新年の清々しい気持ちで綴られた南極の思い出が

満載。きっと次々と湧きあがる思い出を肴に、正月のお屠蘇の味は格別であったに違いありません。

編集連絡先：神田啓史

国立極地研究所 〒173-8515

東京都板橋区加賀 1-9-10

TEL 03-3962-4761

FAX 03-3962-5743

e-mail: hkanda@nipr.ac.jp

### - 新入会員 -

会員番号 / 氏名 / 〒 住所 / / e-mail

233 宮崎 多恵子

234 野口 良男

235 小川 明彦

236 中村 理恵

237 鈴木 秋男

238 五十畑 竹夫

239 牧元 恵里奈

240 須田 陽子